校長室だより

共学共高

第55号

令和5年9月25日発行

発行責任者
白梅学園高等学校長
武　内　　彰

部活動に思う～私見として

私は、現在バドミントン部の顧問を担っている。20 代で都立高校の教員として着任してからほぼすべての期間、バドミントン部の顧問を務めてきた。ほぼ、というのは、島しょの学校に教頭として赴任したとき、バドミントン部がなかったので、島内生で希望する生徒を集めて日曜日にバドミントンを一緒に楽しんだ期間が 3 年間ほどあったからだ。

昨今、巷では教員という職業はブラックだと指摘され、その要因の一つとして長時間、部活動指導に従事しなくてはならないことが挙げられている。国内では、部活動の地域への移行が義務教育段階を中心に進められている。もちろん、アメリカなどの海外へ行けば、教員が部活動を指導することはなく、部活動というものすら存在しない。私の知り得る限りでは、地域がそうした活動を担っており、生徒（保護者）はお金を払って参加しているのが現状だ。

教員が専門外の部活動指導に苦しんでいたり、部活動で時間を拘束されたりするがゆえに、超過勤務を強いられなくてはならない現状は改善されなくてはならない。もはや、教員の善意だけにもたれかかって、存続・成立させることには限界がある。

その一方で、部活動の教育的意義についても軽視することもできない。私自身、中学校では剣道部、高校からはバドミントン部に転向し、現在に至っている。その間、さまざまな人に出会い、自らの技能や精神面の向上に向けてお世話になったり、刺激を受けてきたりした。30 代後半で管理職を志し、その多忙さゆえに東京都教職員バドミントン連盟のみなさんとの関係も 10 数年間、途絶えてしまったが、校長としてある程度落ち着いてからは再び全日本教職員バドミントン選手権大会（年齢別の部）を目指す際に、先生方に温かく迎え入れていただいた思い出がある。

私が若い頃には、だいぶ無茶な練習を生徒たちに強要した。それこそ、ノック練習であれば、求められる水準に達するまで延々と続けていたこともある。その時には、勝利という対戦結果を出させてあげるために、厳しい指導をしていたのだ。確かに、生徒たちは強くなった。西多摩地区で最下位だったチームが、5 年後にはナンバー1 になっていた。その時に科学的な根拠に基づいて適切な指導をしていたかというとそうではない。精神論や根性論を盾にして男子生徒を鍛え上げていた。もちろん、私自身も生徒たちとすべて同じメニューをこなし、ランニングでも筋トレでも、ゲーム練習でも生徒たちに負けたことはなかった。率先垂範というか師弟同行というか、いまから思えば、若気の至りではあった。

40 年近い指導期間を経て、今思うことは、生徒たちの人間形成の一環として部活動をとらえているということだ。スポーツにせよ、文化活動にせよ、同じ嗜好をもった生徒たちが一堂に集い、お互いに切磋琢磨しながら技能・精神の向上を目指していくのが部活動である。そのプロセスにおいて、可能な限り生徒たちの主体性を大切にしながら、高みを目指していかにサポートできるかが顧問としての役割であろう。若い生徒たちのやることであるから、時には歯がゆいこともある。練習でできていることが試合会場に行くと、思うようにできないということも多々ある。練習の一瞬一瞬が試合の一場面として、生徒たちの中に意識されていれば、試合会場へ行っても練習コートと同じ精神状態で立つことができるはずだ。ところが若い生徒たちにはなかなかそれが難しい。「緊張」が前面に出て、思うように実力を発揮できないこともある。しかし、それも貴重な経験である。そうした経験を経て、生徒たちは人間的に成長していくのである。それを見守るのも顧問としての役目だ。

私には 3 人の子供がいる。いずれもすでに成人しており、二人は社会人、一人は学生である。かつて、土日をつぶして部活動指導する私に、子供たちから「お父さんは自分の子供より、人の子供の方が大切なんだよね」と言われたことがあった。その言葉は今でも忘れられない。ただ、いずれの子供も部活動としてバドミントンを選び、今でも共にシャトルを打ち合う機会があることは、私の喜びでもある。白梅学園の生徒たちが参加するオープン大会に息子が出場していることも時折ある。

年齢的にもいつまで自分が指導できるかはわからない。やがて高校にも部活動の地域移行が現実化してくるだろう。そのときに、自らが指導者として生徒たちと関わりたい、あるいは私立学校の特徴・独自性として自校教員による部活動指導を存続させたいという学校や法人の意向を無視するような対応は、あってはならないだろう。授業では見えない顔を生徒たちは部活動で見せる。授業や担任としての関わりだけではつながらない部分が、部活動での関係を通して結ばれていく。全校集会で校長として話す私の姿とは、まったく別の私を見出しているのはバドミントン部の生徒たちであるかもしれない。そこには、共に同じ時間と空間を共有して高みを目指していく、教科学習とは異なる学び、人と人とのつながりがあ

るのだ。

日本の教育の良さは、教員が単に授業だけに特化しているのではないところだ。全人教育に取り組んでいるところが全世界的にも強みであるはずだ。働き方改革はもちろん大切だ。そこへの対応は整えなくてはならない。しかし、部活動で生徒と教員との人間的な触れ合いを通して、生徒の人格形成に尽力している教員たちの存在も忘れてはいけないのではないだろうか。

記憶があいまいなのだが、“Pay　it　forward.”　という言葉を御存知だろうか。日本語で言えば、「恩送り」という意味だったと思う。この言葉は、アメリカの日系企業の副社長であった M 氏から教えていただいたものである。（もしかしたら英語が適切ではないかもしれない。その際はご容赦を）私も中学生の時から部活動を通して多くの大人と出会い、お世話になってきて、今の自分がある。自分が受けた恩をこれからの時代を担う若者たちに還元していく、いわば恩返しをする想いで、今日もバドミントンコートに立つのである。生徒たちが持てる力を出し切って達成感を味わってくれる、その日を目指して。

（共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）